



学校だより

一人一人が主人公

令和6年1月19日
豊岡市立但東中学校
1月号

【学校教育目標：ふるさとの未来を創る 自分をつくる 但東の子】

年頭所感 ～「村を育てる学力」～

保護者の皆様、そして地域の皆様、新年明けましておめでとうございます。旧年中は、本校教育活動の推進にあたり、ご支援とご協力を賜り誠にありがとうございました。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

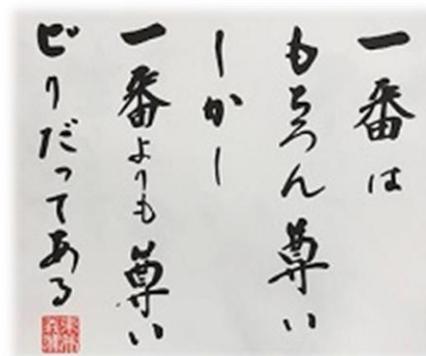
さて、先月の学校だよりにて「温故知新」という表題をつけました。新年にあたり、大変僭越（せんえつ）ではありますが、東井義雄先生の「村を育てる学力」という言葉を引用して、私の年頭所感を述べさせていただこうと思います。

東井義雄先生の著書「村を育てる学力」が発行された当時（1957年）、日本は高度経済成長を背景とした資本主義・競争原理主義が広まりつつあった時代です。東井先生は子どもたちに資本主義の荒波に負けない確かな学力を育成すべく日々奮闘されていました。しかしこの波はやがて都市と地方の経済格差を助長し、貧困にあえぐ地方の村に暗い影を落とすようになります。そして地域社会だけでなく学校教育においても、自分や自分の子さえ勝ち上がればよいという利己的・閉鎖的な考えが広がるようになりました。

東井先生も著書の中で『資本主義の社会である。好むと好まざるとにかかわりなく、「競争」を避けることはできないのも事実だ。「競争」するなら勝たねばならぬ。しかし、この道は人をたおして行く道であると共に、人からたおされていく道である。行けば行くほど、くらしの難くなる道である。』と憂えています。

この問題に対し、東井先生は競争そのものを否定するのではなく、むしろ互いに切磋琢磨することを推奨し、どのような環境でも自らの「生まれがい」を発揮できる「生活の論理」に基づく確かな学力を育成することを目指しました。さらにそれによって得られた成果を独占するのではなく、みんなでその価値を深め共に分かち合おうとする「愛の支え」の醸成こそが重要であると考えました。そしてそのようなことができる子どもであれば、将来どのような環境であっても主体的に自らの幸せを力強く掴み取ろうとするであろうし、同時に自分の生まれ育った村が例えどのように暗く貧しかったとしても愛によって支えることができるであろうと考えたのです。これが半世紀以上に提唱された「村を育てる教育」の原点です。

ではもし仮に東井先生が存命されていて、この令和の時代をご覧になったら、私たちにどのような示唆をくださるだろうかと考えてみました。



「村を育てる学力」は少子高齢化と地方の過疎化が進む現代の日本において再注目されています。しかしともするとそれは「(自分の)村(だけ)を育てる学力」になってはいなか、かつて高度経済成長期の日本に暗い影を落とした「自分や自分の子さえ勝ち上がればよい」という利己的・閉鎖的な考え方に陥ってはいないかと危惧することがあります。だとすれば、それは東井先生にとってさぞかし不本意なことではないかと思うのです。

東井先生は著書の中で、「全ての子どもたちが生まれがいを発揮して幸せを実現させる」ことを願っていました。であるならば、東井先生の提唱した「村を育てる学力」とは、自分の村だけでなく日本の全ての村が抱える社会的課題をも分かち合い、愛によって共に支え合うことができる学力(社会)の実現を願っているに違いないと思うのです。そして私たちはそのような「(全ての)村を育てる学力」の育成をしなければならないと思うのです。

では最後に、東井先生の『自分は自分の主人公』という詩を紹介します。またか、と思うかもしれませんが、実はこの詩には続きがあります。

自分は 自分の主人公

世界でただひとりの 自分を創っていく 責任者

自分をのりこえては

もっと大きい自分を創っていく

もっと豊かな自分を創っていく

もっと強い自分を創っていく

もっと確かな自分を創っていく

もっと深い自分を創っていく

自分を創るのは 自分以外ないのだから

人生は ほんとうの私に めぐりあうための 旅

自分の人生を 自分で こわすようなことだけは してくれるな

自分の人生を 自分で 汚すようなことだけは してくれるな

バカにはなるまい

自分の人生を自分で粗末にする

これをバカといいますね

どうか皆さんは 自分で自分の人生を粗末にするような

バカにはならないよう お願いしたいんです

ひとりのよろこびは

みんなで大きくしてよろこび

ひとりのかなしみは

みんなでわけあって

小さくして 背負いあう生き方

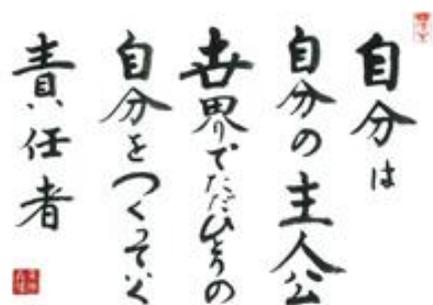
木だって 夏の暑さにも冬の寒さにも耐えて 一つ一つ年輪をつくっていく

つらいこともあるだろうし 悲しいことだってあるだろうが

何くそとのりこえて 一つ一つ 幸福の年輪を刻んでいこうね

悲しみを とおさない と 見せていただけない 世界がある

ほんものはつづく つづけるとほんものになる



東井義雄 『人生の詩』より

どうか本年が皆様にとって素晴らしい年となりますように。そして文末となりましたが、先の能登半島地震で亡くなられた多くの方々のご冥福、並びに残された方々の心の安寧と今後の健やかな生活をお祈りして、私の年頭所感といたします。